

## 大学院助産師養成課程における性教育実習の課題

### Challenges in the Education for Human Sexuality Practicum of a Graduate School Midwifery Course

宮 本 涼 子<sup>1)</sup>

Ryoko MIYAMOTO

関 口 史 絵<sup>2)</sup>

Fumie SEKIGUCHI

高 橋 弘 子<sup>3)</sup>

Hiroko TAKAHASHI

2005 年度以降、A 大学大学院助産師養成課程 2 年生は、選択科目である性教育実習の一環として、B 中学校 3 年生女子を対象に性教育授業を実施している。2011 年度では、実習終了後の院生のアンケートを分析し、今後の性教育実習における課題について検討した。その結果、性教育実習のオリエンテーション時期を早めること、ピアカウンセリング技術の演習を充実させること、サポートメンバーに対する十分な事前説明の必要性が示唆された。また、ディスカッションを繰り返しながら授業プログラムの作成を行ったことは、院生の内省を促していたことが明らかになった。

Since 2005, second-year students in the graduate midwifery course at A College have been conducting an annual education for human sexuality intervention for 8th-grade girls at Middle School B as part of their practicum for the course Education in Human Sexuality. In 2011, graduate students were surveyed after the end of the practicum, and future challenges in the practicum were identified.

Results suggested that the midwifery students should be introduced to the education for human sexuality practicum earlier, that exercises in peer counseling techniques should be improved, and that the concept of the education for human sexuality practicum should be explained to facilitators well before the actual intervention. In addition, the curriculum of a course on delivering the education for human sexuality practicum was created through multiple rounds of discussions with the students. These multiple rounds of discussion led to introspection among graduate students.

キーワード : Education for Human Sexuality Practicum (性教育実習)

Midwifery course at graduate school (大学院助産師養成課程)

Peer counseling (ピアカウンセリング)

1) 天使大学大学院 助産研究科

(2012 年 6 月 29 日受稿、2012 年 11 月 21 日審査終了受理)

2) 前天使大学大学院 助産研究科

3) 天使大学 看護栄養学部 看護学科 非常勤講師

## I. はじめに

1994年にカイロで開催された国際人口開発会議では、リプロダクティブヘルス／ライツ（性と生殖に関する健康と権利）の確立を目指し、女性は生涯にわたって身体的・精神的・社会的に健康であることと、それを享受する権利があることが提唱された<sup>1)</sup>。また、1995年に北京の世界女性会議で採択された北京行動綱領には、女性が自らのセクシュアリティに関することを自由に責任をもって決める権利が含まれることが盛り込まれ、自己決定権について明記された<sup>2)</sup>。これらを背景とし、日本でも女性の性に関する健康と権利を守ることは、男女共同参画社会基本法に基づく「男女共同参画基本計画」に具体的施策として取り入れられている。

助産師はリプロダクティブヘルスに関わる専門職として、全てのライフステージにある女性の健康を保持・増進する役割が期待されている。特に、思春期においては、若者の主体性と自己決定能力を育成し、より豊かな人生を目指して生きられるようにすることが必要である。

しかし、予期せぬ妊娠、ハイリスク妊娠、不妊、人工妊娠中絶、性感染症、DVなど「性と生殖の健康」をめぐる問題は、日本の女性の健康にいまだに大きな影を落としている。特に思春期の人工妊娠中絶や性感染症、薬物乱用等の問題や心身症、不登校、引きこもり等の問題は、「健やか親子21」<sup>3)</sup>の2014年までの主要課題のひとつであり、それは「思春期の保健対策の強化と健康教育の推進」として示されている。また、思春期の健康と性の問題に対しては、同世代から知識を得るピアエデュケーター、ピアカウンセリングなどの思春期の若者が主体となる取り組みが推進されている。高村<sup>4)</sup>は、従来の一方的な知識の提供による健康教育が行動変容をもたらすことは難しいとし、ピアカウンセリングの手法を用い、「性の自己決定能力」の獲得を目指した性教育の有効性を述べている。

これらの背景から、A大学大学院では2005年度より、思春期における性の自己決定能力の育成という視点に立ち、助産師養成課程2年生がピアカウンセリング技術を用いた性教育の授業を行っている。この授業は、助産師養成課程2年生がA大学大学院助産師養成課程の実習科目「性教育実習（選択）」の一環として、性教育授業プログラムを作成し、中学生女子に対して実施しているものである。

先行研究では、ピアカウンセリングの手法を用いた性教育の有効性<sup>5) 6) 7)</sup>について性教育を受けた立場の視点を中心に多く報告されているが、ピアカウンセリングを実践した立場からの課題に関する報告は少なく、助産師養成課程の大学院生の性教育実習に関する報告も少ない。

本稿では、本学の性教育実習履修者によるアンケートをもとに、ピアカウンセリングの手法を用いた性教育実践における助産師養成課程の大学院生の気づきや学びについて報告し、今後の性教育実習の課題について検討する。

## II. 性教育実習の概要

### 1. 本実習の位置づけと目的・目標

#### 1) 性教育実習の位置づけ

A大学大学院助産師養成課程の院生は、2年間をかけて基礎科目、実践専門科目、発展・展開科目、特別統合研究科目に4分類された科目を履修する。このうち、発展・展開科目には子育て支援、性教育、ウィメンズヘルス、国際助産学の4コースが設定されている。これら4コースの総論は必修で全員が学び、その中から一つを選択し、さらに講義、演習または実習によって理解を深める(表1)。

表 1. A 大学院助産師養成課程 2 年生の発展・展開科目と関連科目の進行

2011年度 2年次	発展・展開科目				関連科目		
	国際助産	子育て支援	ウイメンズヘルス	性教育			
4月	助産国際 Ⅰ (必修)	助産国際 Ⅱ (選択)	[子育て支援論Ⅰ(必修)は1年次後期に終了]	[ウイメンズヘルスⅠ(必修)は1年次後期に終了]	性教育Ⅰ (必修)	特別統合課題研究	ハイリスク助産 演習 独立助産実習 健康教育論Ⅱ
5月							
6月							
7月							
8月							
9月	夏期休暇						
10月		子育て支援論Ⅱ(選択)	ウイメンズヘルスⅡ(選択)	性教育Ⅱ(選択)	実習オリエンテーション		マタニティ サイクル 統合実習Ⅱ
11月	国際助産学 実習(選択)	子育て支援論 演習(選択)	ウイメンズヘルス 演習(選択)	性教育 実習(選択)	B中学校での打ち合わせ 全体リハーサル 授業① 授業②		
12月					授業③		

性教育では、2年次前期に性教育 I (全 8 回) が開講される。性教育 I では、A 大学大学院助産師養成課程 2 年生全員が、性教育実施に必要な基本的知識と方法を学習する。そして、発展・展開科目で性教育を選択した院生は、2 年次後期に開講される性教育 II (全 15 回) において、学校教育での性教育の位置づけ、学校での授業方法、ピア

カウンセリングの意義と方法等について学んだ後、性教育実習において、中学校での性教育を計画し、出前授業またはピアカウンセリングとして性教育を実践する。

## 2) 性教育実習の履修者数

2005 年度からの性教育実習の履修者数を、表 2 に示す。

表 2. 「性教育実習」履修者数

科目名	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011
性教育実習 (性教育演習)	12	6	7	7	7	7	6

※2006 年度より、「性教育演習」から「性教育実習」へ科目名変更となった

## 3) 性教育実習の目的

「性教育 I」「性教育 II」で学習してきたことを総合し、実際に中学校での性教育を計画し、出前授業またはピアカウンセリングとして実践する

## 4) 性教育実習の目標

- (1) 中学校での性教育を計画することができる
- (2) 対象をアセスメントし、対象のニーズに合わせて、性教育の内容、方法を修正、調整することができる

- (3) 出前授業またはピアカウンセリングとして実践できる
- (4) 自分たちの行った性教育を評価することができる

## 2. 性教育実習の概要

2011年度の性教育実習では、S市内のB中学校で計3クラス計75名の女子を対象に性教育授業

を実施した。この授業はB中学校から依頼を受け、2005年度から毎年行っている。B中学校の技術家庭科目における「生と性」という単元名のもと、B中学校家庭科教諭と連携をとりながら授業を実施した。

### 1) 性教育実習の実際

性教育授業は、3回実施した。場所、授業時間、対象者、授業者については、表3に示す。

表3. 性教育実習の実際

	第1回目	第2回目	第3回目
場所	B中学校 会議室	B中学校 会議室	B中学校 会議室
授業時間	90分	90分	90分
対象者	B中学校3年生女子 25名	B中学校3年生女子 26名	B中学校3年生女子 24名
授業者	性教育実習履修者 6名 サポートメンバー 5名	性教育実習履修者 6名 サポートメンバー 4名	性教育実習履修者 6名 サポートメンバー 5名

## 2) 性教育授業実施に向けた準備

### (1) オリエンテーション

性教育実習の1か月前に、科目責任者と科目担当教員が性教育実習履修者6名に対してオリエンテーションを実施した。オリエンテーションの内容は、性教育実習の概要、授業日時、B中学校家庭科教諭との打ち合わせ日時の決定、授業日までのスケジュール作成をして計画的に学習を進めることについてであった。

### (2) B中学校での打ち合わせ

オリエンテーションから5日後にB中学校において性教育実習履修者6名、B中学校家庭科教諭、科目責任者、科目担当教員が打ち合わせを実施し、履修者6名はB中学校家庭科教諭に対し中学生女子のニーズ把握を目的としたアンケート調査の実施を依頼した。

### (3) プログラム立案と修正

性教育実習履修者6名は、B中学校での打ち合わせ後、履修者間で意見交換を繰り返しながらプログラムを立案した。その後、履修者はB

中学校家庭科教諭との打ち合わせ(計3回)、科目責任者と科目担当教員による助言、リハーサルを通し、プログラム内容の検討を重ねた。プログラム内容は5回の修正を要した。

### (4) リハーサル

性教育実習履修者6名は、性教育実習の12日前と6日前の2回にわたり学内で全体リハーサルを行い、時間配分や配置について調整した。リハーサル時にはビデオ撮影を実施し、討論を行った。

また、授業実施の際、性教育実習履修者以外の院生2年生からサポートメンバーを募集し、7名の協力者を得た。サポートメンバーにはリハーサルから参加してもらうよう呼びかけたが、サポートメンバーが選択している発展展開科目の演習、実習スケジュールにより、結果的にはリハーサルに出席できずに性教育授業に臨むサポートメンバーもいた。

表 4. 性教育授業実施までのスケジュール

時期	内容	時間
性教育授業 1 か月前 ↓	オリエンテーション	1
	タイムスケジュール作成	1
	中学生女子のニーズ把握のアンケート作成	2
	B 中学校教員との打ち合わせ アンケート調査実施依頼	1
	プログラム立案	4
	アンケート回収	1
	プログラム修正（1 回目）	3
	アンケート集計	2
	B 中学校教員との打ち合わせ プログラム修正（2 回目） 授業シナリオ作成	4
性教育授業 14 日前 ↓	教材作成	4
	プログラム修正（3 回目）	3
性教育授業 12 日前 ↓	全体リハーサル（第 1 回目）	5
	部分リハーサル シナリオ・媒体修正	3
	プログラム修正（4 回目） B 中学校教員との打ち合わせ	3
	プログラム修正（5 回目）	2
	シナリオ修正	2
性教育授業 6 日前 ↓	全体リハーサル（第 2 回目）	5
	部分リハーサル	3
性教育授業 3 日前 ↓	B 中学校教員との打ち合わせ	1
	教材作成	1
性教育授業 1 日前	部分リハーサル	3
性教育授業 1 回目		2
性教育授業 2 回目		2
性教育授業 3 回目		2
		計 60 時間

### 3) プログラム最終案

#### (1) 性教育授業におけるテーマ

『今を「生」きる自分という「性」～わたしが大切にしたいもの～』

#### (2) 目標

##### ①命の誕生、妊娠・出産について

- ・命の始まりを知り、命の尊さや自分も相手も大切な存在であることを認識できる
- ・自分の身体が今後命を生み出す存在になることを理解できる

##### ②思春期の心とからだについて

- ・思春期の心の特徴を理解することができる
- ・二次性徴について理解することができる
- ・自分のからだの変化に伴う適切な対処方法や予期的な行動について情報を得ることで、自分のからだを知ろうとすることができる
- ・性同一性障害や同性愛など、性の多様性について知ることができる

##### ③人との付き合いについて

- ・豊かな人間関係を築くために、言葉を用いて自分の気持ちを伝えることの重要性を理解できる
- ・性行為の目的やリスク、避妊方法を理解できる
- ・上記を理解した上で、パートナーとの望ましい関係性を築いていくための行動選択について考えることができる
- ・デートDVや虐待についての知識を得て、対処法が理解できる

#### (3) プログラム内容と実施方法

具体的なプログラム内容と実施方法は、表5に示す。

性教育授業は、ピアカウンセリング技術を用い、中学生の仲間である「ピア」として一緒に考える立場で性教育を実践することに重点を置いて実施した。性教育実習履修者6名は性教育Ⅱとプログラム立案を通してピアカウンセリングの概念について学習し、サポー

トメンバーへは性教育実習履修者がピアカウンセリングについて説明を行った。

中学生女子5～6名のグループに対して院生2名（性教育実習履修者1名とサポートメンバー1名）を配置し、中学生女子が自分の意見を伝えやすく、院生の目が行き届きやすい環境をつくった。中学生女子のグループ編成は、性教育実習履修者が事前にB中学校家庭科教諭からいじめの有無や席順、クラス替えがないこと等の情報を得た上で行い、編成後B中学校家庭科教諭にグループメンバーの確認を依頼した。



表5. 性教育実習プログラム最終案

時間	内容	具体的内容と実施方法
導入 [8分]	挨拶・ピアの紹介 テーマ・プログラム説明 中学生の自己紹介 助産師の職業紹介	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ピアの自己紹介</li> <li>・司会者が本日の授業内容、助産師の職業について説明する</li> <li>・各グループで自己紹介をしてもらい、全員が名札をつける</li> </ul>
展開Ⅰ [15分]	命の誕生、妊娠・出産について <ul style="list-style-type: none"> <li>・男性器と女性器のちがい</li> <li>・妊娠・出産</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・受精のしくみの紙芝居、妊娠各期の胎児人形、お腹の様子を描いたエプロン、骨盤模型を見せ、中学生には、シャープペンで卵子の大きさを描いてもらう</li> <li>・産後の両親が児の誕生を喜んでいる様子の写真を見せ、中学生には新生児人形を抱っこしてもらう</li> </ul>
展開Ⅱ [15分]	思春期のこころとからだについて <ul style="list-style-type: none"> <li>・思春期のこころ</li> <li>・思春期のからだの変化</li> <li>・月経</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生まれてきた存在から生む存在になること、思春期の特徴について説明する</li> <li>・ピアが思春期の頃の体験談を話す</li> <li>・男性特有のからだの変化、性的衝動のコントロールについて説明する</li> <li>・女性特有のからだの変化、月経、月経の対処法、PMSの説明をする。中学生にマイカレンダーを配布し、自分の月経周期を数えてもらう</li> </ul>
休憩[10分]		
展開Ⅲ [44分]	人との付き合いについて <ul style="list-style-type: none"> <li>・言語的コミュニケーションの重要性</li> <li>・事例紹介</li> <li>・避妊の方法</li> <li>・デートDV</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・言葉で自分の考えを伝えることの大切さについて、ピアが思春期の頃の体験談を交えながら説明する</li> <li>・ブレイクゲーム：共同絵画を各グループで実施する</li> <li>・中学生男女が性行為に及ぼうとする場面をピアが寸劇で実施し、中学生にその後二人がどのような行動をとったか話し合い、意見を発表してもらう。司会者は発表内容をまとめる</li> <li>・性行為のリスク、感染症予防としてのコンドームの必要性について説明する。今の時期は性行為をしないように伝え、性行為を断ってもいいことを保証する</li> <li>・司会者が避妊の必要性について説明した後、コンドームの使い方について伝え、グループのピアが1人実際に開けて装着し、コンドームのつけ方を説明する。中学生はコンドームに触れ、実際にモデルに装着する</li> <li>・司会者はデートDV、暴力について説明し、名札の裏に書いてあるいのちの電話の紹介をする</li> </ul>
展開Ⅳ [2分]	授業のおさらい 中学生へのメッセージ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・司会者が学習内容について振り返り、大切にしてほしいことを再度伝える</li> </ul>
まとめ [6分]	アンケート	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中学生にアンケートを記入してもらう</li> </ul>

### Ⅲ. 性教育実習の評価

#### 1. 性教育実習の評価方法

性教育実習履修者6名を対象に、性教育実習終了後に記名自記式のアンケート用紙を配布した。回収は筆者である科目担当教員が行った。

アンケート内容は、性教育実習のオリエンテーション時期に対する評価、性教育実習のプログラム作成開始時期、性教育実習の準備期間に対する評価、性教育の授業を実施するにあたり不足していた教材の内容、科目担当教員への要望、ピアカウンセリング実践を通しての気づき、性教育実習での学びの7項目で、オリエンテーション時期やプログラム作成時期、性教育実習の準備期間についての回答は選択式、他は自由記載とした。

#### 2. 分析方法

二者択一の選択式の回答は単純集計し、自由記載部分に記載された内容は、内容が類似しているものをまとめて分類した。

#### 3. 倫理的配慮

性教育実習終了後日、本報告の趣旨とアンケートの結果をデータとして使用すること、参加は自由意思であり同意後も辞退可能であること、データは個人が特定できないように処理すること、結果は天使大学紀要で公表することを口頭で説明し、口頭にて同意を得た。

#### 4. 結果

アンケート結果の使用について同意が得られた性教育実習履修者数は6名中5名であった。アンケートの内容は表6に示したとおりである。

##### 1) 性教育実習のオリエンテーション時期に対する評価

「適切」と回答した者が1名、「適切でなかった」と回答した者が4名だった。「適切でなかった」理由として、「もう少し早い方がよかった」「統合実

習Ⅱの後の早い時期がよかった」という内容があげられた。

##### 2) 性教育実習の準備期間に対する評価

「十分だった」と回答した者が4名、「十分でなかった」と回答した者が1名だった。「十分でなかった」理由として、「準備にかかる時間はちょうどよかったが、とりかかる時期が遅かった」という内容があげられた。

##### 3) 科目担当教員への要望（自由記載）

教員に改善してほしい点として、「“ピアとは”という定義を理解することが時期的に遅かったと思う。サポートメンバーを含め、性教育Ⅱの中にピアカウンセリングの内容を盛り込んで講義をしてほしい」、「早くからスケジュールを立てられるように、性教育実習のオリエンテーション時期を前期の終わりか後期の始まりにしてほしい」という意見があった。

##### 4) 性教育実践における気づき（自由記載）

サポートメンバーとの協力体制に対する気づきの内容として、「サポートメンバーのやる気と自分たちが考えていたやる気が違っていたので、次年度はサポートメンバーのモチベーションや関わり方を考えた方がよいと思った」、「サポートメンバーとのずれがあった。自分たちの中でも、サポートメンバーに求めるサポートの度合いについては考えが一致していなかった。サポートメンバーのピアカウンセリングへの理解などできるだけ共通理解できるところはできるように十分配慮する必要があった」、「サポートメンバーへの対応について、自分たちがしっかり事前に話し合っただけで依頼の方がよかった。配慮に欠けているところがあった」という意見があった。また、中学生の対象理解に関する気づきとして、「中学生のレディネスを考えながらプログラムを作成したが、実際に中学生と関わると対象理解が浅かった」という声があった。ピアカウンセリングに関わる内容としては、「ピアとは言いつつも上から目線で中学生を



表 6. 性教育実習終了後アンケート

項目	人数および内容	
1. 性教育実習のオリエンテーション時期に対する評価	「適切だった」 「適切でなかった」 「適切でなかった理由」	1名 4名 「もう少し早い方がよかった」 「統合実習Ⅱの後の早い時期がよかった」
2. 性教育実習の準備時間に対する評価	「十分だった」 「十分でなかった」 「十分でなかった理由」	4名 1名 「準備にかかる時間はちょうどよいが、とりかかる時期が遅かった」
3. 科目担当教員への要望（自由記載）	<p>「“ピアとは”という定義を理解することが時期的に遅かったと思う。サポートメンバーを含め、性教育Ⅱの中にピアカウンセリングの内容を盛り込んで講義をしてほしい」</p> <p>「早くからスケジュールを立てられるように、性教育実習のオリエンテーション時期を前期の終わりか後期の始まりにしてほしい」</p>	
4. ピアカウンセリング実践を通しての気づき（自由記載）	<p>「サポートメンバーのやる気と自分たちが考えていたやる気が違っていたので、次年度はサポートメンバーのモチベーションや関わり方を考えた方がよいと思った」</p> <p>「サポートメンバーとのずれがあり、サポートメンバーのピアカウンセリングへの理解などできるだけ共通理解できるところはできるように十分配慮する必要がある」</p> <p>「サポートメンバーへの対応について、自分たちがしっかり事前に話し合っただけで依頼した方がよかった。配慮に欠けているところがあった」</p> <p>「ピアとはいっても上から目線で中学生を見てしまいがちになる」</p> <p>「中学生のレディネスを考えながらプログラムを作成したが、実際に中学生と関わると対象理解が浅かった」</p> <p>「対象の反応や具体的な声かけ、言葉の選び方などをリハーサルできればよかった」</p>	
5. 性教育実習での学び（自由記載）	<p>「メンバー内でそれぞれの意見や価値観を共有できたのがよかった」</p> <p>「メンバーが互いの思いを出し合いながら、納得した内容を創り出せたことはとてもよい経験になった」</p> <p>「自分の考えを振り返ったり、考えを広げたりすることができた」</p> <p>「中学生に伝えた“言葉で伝えることは大切”ということは今の自分にも言えることだと痛感した」</p> <p>「プログラムを作成し実施していく中で、中学生に伝えたかったメッセージを自分達自身身にしみて感じる事ができた」</p> <p>「自分も絶えず悩みながら物事に対して向き合っているという点で、思春期の中学生も自分も一緒なんだと気づいた」</p>	

見てしまいがちになる」、「対象反応や具体的な声かけ、言葉の選び方などをリハーサルできればよかった」という反省もあげられた。

#### 5) 性教育実習での学び（自由記載）

性教育実習履修者は、プログラム作成過程における履修者間での意見交換を通し、「メンバー（履修者）内でそれぞれの意見や価値観を共有できたのがよかった」、「メンバー（履修者）が互いの思いを出し合いながら、納得した内容を創り出したことはとてもよい経験になった」、「自分の考えを振り返ったり、考えを広げたりすることができた」という学びを得ていた。

また、「中学生に伝えた“言葉で伝えることは大切”ということは今の自分にも言えることだと痛感した」、「プログラムを作成し、実施していく中で、中学生に伝えたかったメッセージを自分達自身にしみて感じる事ができた」、「自分も絶えず悩みながら物事に対して向き合っているという点で、思春期の中学生も自分も一緒なんだと気づいた」と授業プログラムの作成と実施を通し、自己を振り返るという経験もしていた。

### IV. 考察

実施したアンケートの結果を中心に、1. 性教育実習の準備における課題、2. サポートメンバーにおける課題、3. ピアカウンセリング実践における課題について考察する。

#### 1. 性教育実習の準備における課題

性教育実習のオリエンテーション時期について、「適切でなかった」と回答した者が5名中4名であった。その理由は、「もう少し早い方がよかった」という意見であったことから、オリエンテーション時期が適切でなかったことが推測できる。

性教育実習履修者6名は、性教育授業の約1か月前に性教育実習のオリエンテーションを受け、

性教育授業のプログラム作成を開始した。助産師学生による性教育授業の実践報告<sup>8)</sup>では、オリエンテーションから性教育授業実施までの期間を約3か月確保していたことがタイムスケジュールに示されている。他の科目も並行して履修している状況を考えると（表1参照）、プログラム立案・修正、中学校との打ち合わせ、教材作成、リハーサルを計画的に進めるためには、性教育授業の遅くとも2か月前にはオリエンテーションを実施することが必要であったと考える。

一方で、性教育授業までの準備期間については、5名中4名が「十分だった」と回答しており、「十分でなかった」という1名も「準備にかかる時間はちょうどよいが、とりかかる時期が遅かった」という理由であった。このことから、オリエンテーション時期検討の必要性は示されたが、準備期間は不足していなかったと考える。準備期間が十分であったと回答されたことは、性教育実習は1単位45時間の設定であるが、実際にかかった時間数は約60時間と予定していた時間数を上回っていたことに裏付けられる。そのため、今後は、性教育実習において実際に要している時間を詳細に把握し、単位数の見直しを検討する必要がある。

#### 2. サポートメンバーにおける課題

性教育実習履修者のアンケートの回答からは、性教育実習履修者間でサポートメンバーに求めるサポート内容や程度の共通理解が図られていなかったという反省や、サポートメンバーと共通認識を持って性教育授業に臨めなかったという反省がうかがえた。

ピアカウンセリングの手法を用い、中学生一人ひとりに目を配った性教育授業を実施するには、現状から考えると10人程度の性教育実習履修者を確保することが望ましい。しかし、表1の通り履修者数が少なく、年度によって人数が異なるため、履修者だけで性教育授業を実施することは

困難と教員が判断し、例年サポートメンバーの協力を得ながら性教育授業を実施していた。だが、サポートメンバーもこの時期にそれぞれ、性教育実習とは異なる発展・展開科目の演習・実習中であり、自分たちで時間調整を行い性教育授業に協力しなければならない。そのような状況下で、性教育実習履修者はサポートメンバーにできるだけ負担をかけないように、内容を考えてサポートの依頼をすることを心がけた一方で、サポート内容、程度の度合いについて、性教育実習履修者間で共通理解を図っていなかった。このことは、サポートメンバーに、何をどの程度サポートするとよいのか、性教育実習履修者とサポートメンバーの違いは何かといった混乱や疑問をもたらしたことが推測できる。また、サポートメンバーが選択している発展・展開科目の演習や実習が性教育授業と重なる日もあり、授業ごとにサポートメンバーが入れ替わったり、役割が異なったりする事態が生じていた。さらに、中には発展・展開科目の実習と重なり、リハーサルに出席できないまま性教育授業に臨むサポートメンバーもいた。性教育Ⅱや性教育実習を履修していないサポートメンバーにとって、このような状況のもとサポートを実施することは、性教育授業の全体像が見えにくく困難だったことが推測できる。円滑な性教育授業の展開のためには、性教育授業の目的、目標、方法等における履修者とサポートメンバーの共通認識は不可欠であった。共通認識の不足は、対象者である中学生女子へ、グループワークの方法の統一が図られないなどの不利益をもたらした可能性も考えられる。

以上のことから、性教育実習履修者とサポートメンバーが同じ目標に向かって授業を実施するためには、サポートメンバーが履修者と共に、性教育Ⅱのピアカウンセリングの演習を受けられるように調整したり、サポートメンバーに向けたピアカウンセリング講座を実施したりすることが必要である。同時に、性教育授業の目的、目標につい

て性教育実習履修者と教員がサポートメンバーへ説明し、協力を要請したサポートメンバーには必ずリハーサルに参加してもらう機会を作る必要性も示唆された。

また、性教育実習履修者6名は性教育授業の準備を進めながら、性教育授業のサポートメンバーを募集し、サポート内容の説明を実施していた。プログラム作成や打ち合わせ、リハーサルに、サポートメンバーの人数調整、サポート内容の説明といった準備が加わり、履修者の負担が大きかったことが推測できる。次年度以降は、サポートメンバーの協力を要請せずに実施する性教育授業の展開方法を考える必要性も示された。

### 3. ピアカウンセリング実践における課題

ピアカウンセリングとは、人間の成長と心の健康に関する知識とともに、アクティブリスニングと問題解決スキルを用いて、年齢、社会的地位、抱えている問題などにおいて立場が同様である人々に、ピア（仲間）の意識をもって行うカウンセリングである<sup>9)</sup>。

この定義から考えると、青年期の大学院生である性教育実習履修者と思春期の中学生女子とは年齢も直面する課題も異なり、立場が同様ではないが、性教育実習では性教育実習履修者はピアの意識をもって授業プログラムを立案し、性教育授業を実施することを目的としていた。しかし、結果として、性教育実習履修者は、中学生女子が直面する思春期の課題をピアとして同じ目線でとらえるのではなく、助産師を志す学生としての目線でとらえる傾向があったという気づきを得ていた。

この背景には、性教育実習履修者が助産師を志す大学院生として専門的知識を持っていたことから、自分たちよりも知識や経験が少ない中学生女子に正しい知識を享受し、思春期特有の悩み解決のためのアドバイスを与えるという意識が形成されていたことが推測できる。

その一方で、中学生女子に人間関係における言

葉で伝えることの重要性を教えよう、伝えよう、としていた性教育実習履修者は、性教育授業の準備過程における履修者同士の意見交換やサポートメンバーとの調整を通して言葉で伝えることの重要性を感じ、その結果、中学生女子が直面している問題が自身にもあてはまることを実感していた。これには、意見交換や調整を重ねて授業プログラムを作成したことが、「メンバーが互いの思いを出し合えた」、「メンバーそれぞれの意見や価値観を共有できた」という自身のピアカウンセリング体験となり、「自分の考えを振り返ることができた」というように自身の内省が促されたことが影響していると推察できる。

意見交換を通し、履修者自身が自己を内省したことは、プログラム内容の修正にも影響をもたらしたと考える。プログラム内容は、自分たちが中学生女子に知ってほしいことを中心にした当初のものから、中学生女子のアンケート結果を生かし、中学生女子のニーズを取り入れたプログラム内容へと変化した。そして、意見交換をしながら内容の検討を重ね、中学生女子のニーズを取り入れたプログラム内容が表面的で心に響かないという気づきを得た。改めて、履修者は自己決定能力を育成するという視点に立って客観的にプログラム内容を見直し、中学生女子が具体的にイメージできる教材や自分のこととして考えられる状況設定を用いたグループワーク、履修者が自身の思春期における体験談を話すことを取り入れた最終プログラム案が完成した。

近年の専門家の実践における理論と実践の関係に関する研究では、反省的实践が取り上げられている。反省的实践とは、状況と対話し、経験で培われた暗黙知を駆使して問題を名付け構成し直す思考を展開することと定義づけられる。この研究においては、従来の専門家はクライアントの抱える問題に対し専門的知識や科学的技術を合理的に適用する実践を推進するが、反省的实践家は同僚と協同しクライアントとも協同関係を築いて、問

題を探索し学び合って解決することが明らかになっている<sup>10)</sup>。反省的实践家は、問題状況の省察だけではなく、その活動を遂行している実践者自身をも省察する。このことは、性教育実習履修者の体験と一致する。

以上のことから、今後は、年齢の差がある状況下において、大学院生が中学生のピアとしての役割を果たしピアカウンセリングを実践するためには、性教育実習履修者自身の内省が促されるような演習の工夫や、ピアとしての役割を果たせるように支援をしていくことの必要性が示唆された。

さらに、性教育実習履修者は、中学生女子に対する具体的な声かけや言葉の選び方など、ピアカウンセリング技術について性教育授業実施前に習得する必要があったという反省点をあげていた。

性教育Ⅱでは、講義・演習を通し、ピアカウンセリングの概念について学習することになっているが、以上のアンケートの結果から、性教育実習履修者のピアカウンセリング技術習得が不十分であることが示唆された。ピアカウンセリングを実施するためには、ピアカウンセリング技術の習得が必要不可欠である。今後は、ピアカウンセラー養成講座のカリキュラム内容を参考に、ロールプレイを取り入れたり事例を用いたディスカッションを取り入れたりして、ピアカウンセリング技術の演習を行うことが課題である。加えて、ピアカウンセラー養成講座への参加も勧め、より高いピアカウンセリング技術を獲得して性教育実習に臨めるよう支援する必要があると考える。

## V. 今後の課題

本調査は単年度の実施であるため、今後は縦断的に調査を実施し、データ数を増やして科目の評価を行う必要がある。また、中学生女子のニーズや性教育授業の評価を明らかにし、助産師養成課程の大学院生が実践するピアカウンセリングの効果について多角的に検証する必要がある。



## VI. 結論

今回は、ピアカウンセリング技術を用いた性教育実践における助産師養成課程の大学院生の気づきや学びから、今後の性教育実習運営上の課題について検討した。その結果、以下のことが明らかになった。

1. アンケートの結果から、性教育実習のオリエンテーション時期は性教育授業の2か月前が望ましいことが示唆された。今後は、性教育授業への準備時間を詳細に把握し、単位数の見直しを検討する必要がある。
2. 性教育授業にサポートメンバーの協力を依頼する場合は、性教育授業の目的、目標を説明し、リハーサルに必ず参加してもらい、性教育実習履修者とサポートメンバーが共通認識を持って性教育授業に臨めるようにする必要がある。また、次年度以降は、サポートメンバーの協力を要請せずに実施する性教育授業の展開方法を考える必要性も示された。
3. 効果的なピアカウンセリングを実践するためには、性教育実習履修者自身の内省が促されるような演習の工夫や、ピアカウンセリング技術の演習を実施することが必要である。

## VII. 謝辞

性教育授業を受けていただいたB中学校3年生の皆様、実施にあたりご協力いただいたB中学校家庭科の先生に深く感謝致します。また、2011年度「性教育Ⅰ」「性教育Ⅱ」の科目責任者であった大石時子先生、性教育授業にご協力いただいたサポートメンバーの皆様、2011年度「性教育実習」選択者である大高三奈さん、佐藤美南さん、清水愛さん、西尾麻奈未さん、平城ゆりさん、布施早苗さんに心より感謝致します。

## 引用文献

- 1) 村本淳子，高橋真理：ウィメンズヘルスナーシング概論－女性の健康と看護－，52，2011。

- 2) 前掲1)，52。
- 3) 厚生労働科学研究費補助金（子ども家庭総合研究事業）研究班：「健やか親子21」公式ホームページ，  
<http://rhino.med.yamanashi.ac.jp/sukoyaka/>，2012年6月1日閲覧。
- 4) 高村寿子：思春期の性の健康を支える ピアカウンセリング・マニュアル ピアカウンセラー養成者・コーディネータ（調整役）版，11，小学館，2008。
- 5) 伏見正江，山下貴美子，松尾邦江他：思春期のヘルスプロモーションに関する実証研究 ピアカウンセリングの有効性について，山梨県立看護大学短期大学部紀要，8(1)，13-25。2003。
- 6) 牧野孝俊，栗田佳江，池田優子他：高校生に対して看護学生が行ったピアエデュケーションの効果－3つのエデュケーションの実践から－，高崎健康福祉大学紀要，No.7，67-80。2007。
- 7) 安達久美子，高田昌代，西澤由季他：ピアエデュケーションを用いた性教育に対する高校生の受け止め方。神戸市看護大学紀要，No.10，33-42。2006。
- 8) 弓削美鈴：助産専攻学生による性教育出前講座の評価。佐久大学看護研究雑誌，3(1)，45－52，2011。
- 9) 高村寿子：思春期の性の健康を支える ピアカウンセリング・マニュアル ピアカウンセラー養成者・コーディネータ（調整役）版，29，小学館，2008。
- 10) 佐藤学：教師というアポリアー反省的实践へー。世織書房，142 - 150。2010。

## 参考文献

- 1) ドナルド・A・ショーン：省察的实践とは何か プロフェッショナルの行為と思考，鳳書房，2009。